

回答例から受かる型を見つけ 自分の強みをアピールしよう

——2つ目は、「ESや面接で自分の強みをどうアピールしたらいいのかわからない」という悩みです。

坂本 ほとんどの学生にとって就活は初めての経験なので、全員最初はどうアピールしたらいいのかわかりません。初めてつくる料理って感じですね。でも、初めてでもレシピがあればつくれると思います。レシピというのは、料理が上手な人が「こうすれば美味しくつくれる」と考えたものです。自己PRや志望理由にもまったく同じことが言えます。つくり方がわかるレシピを探してくればいいんです。それが、書籍などに載っている、実際に内定した人の回答例です。友達どうしで考えたり真似し合ったりしても、まだ受かっていない人の意見では意味がありません。

——回答例はネットでも手に入りますが、それはどうでしょうか？

坂本 ネットにある回答例は信ぴょう性がとても低いです。なぜなら、内定を得た人は企業に目をつけられたくないので、自分の例をネットに出すということはないからです。

——内定先の企業が見たらわかっちゃいますからね。

坂本 なので、ネットには内定をもらえなかった人の例が多いですね。ESを買い取ってくれる会社もあるので、内定がとれなかった企業のESを売る学生は多いのです。だから、レベルが低くなっているんですね。

——それを参考にしてもしょうがないですね。では先輩とか実際に内定している人の例を見るのはよさそうですね。

坂本 そうですね。ただ少数だと考え方が偏ってしまうことがあります。たとえ

ば、スポーツを軸にする人もいれば、文化系活動を軸にする人もいます。人それぞれ自己PRのポイントが違うので、自分と異なる例を無理やり活用しようとすると、苦しい内容になってしまいます。だから、たくさん人の回答例を見て、自分が真似しやすい例をレシピとして使うとよいでしょう。いろんな人の良い部分を組み合わせて、自分なりの回答例にカスタマイズしていくのもいいですね。

——そうすると、型にはまった自己PRができてしまう気もしますが、気にしないでよいのでしょうか？

坂本 重要なのは、型の完成度です。たとえばスポーツでも、一流のスポーツ選手の手型にはまるのはいいことです。新聞記者でも、まずはプロの記者が書いた記事を徹底的に書き写して、うまい人の型を覚えていきます。ピアノだって上手い人の演奏をまねするところからはじまります。型にはめるのが悪いことなのではなく、内定していない人の回答の型にはまってしまうことが問題なんです。この型というのは、語学でいう文法に似ています。多くの学生は、正しい文法ができていない自己流英語で話しているようなものなんです。

——正しい型にはめたあとに、人と違った要素を加えていけばいいんですね。どうすればオリジナルの内容にしていけるのでしょうか？

坂本 自分に合う回答例を見つけたら、あとは言葉を入れ替えるだけでいいんです。スポーツのジャンルや実績の数字など、少し変えるだけで自分のものにする回答例を見つけられるかどうか重要です。

——ゼロからオリジナルのものを考えようとするから、なかなか書けないし、魅力が十分に伝わる内容にならないんですね。

坂本 料理と同じで、最初はレシピどおりにつくったほうがいいんです。最初からレシピと違うものをつくっても、失敗するリスクのほうが高くなってしまいます。それと、誤解されがちなんです。面接官はものすごい自己PRを求めているわけではありません。

——面接官が求めるレベルとはどれくらいでしょうか？

坂本 ESは、内定者程度のレベルで充分です。実際にそれで通っているわけですから。それ以上のは要求していません。その企業の社員がみんな、なんでも完璧にできるスーパーマンみたいな人ばかりというわけではないですから

ね。仕事に対する基本的な姿勢や適性がある人を求めています。

—— **回答例は大いに参考にしているんですね。**

坂本 現代の就活において、学生が個性を殺してしまうことに対する批判もあります。ですが、それは別の問題として、現実には個性は出ていなくても内定はもらえます。むしろ、**個性があっても、中身がともなっていないければ落とされてしまいます。**自分を良く見せるよりも、企業が求めていることを把握して、うまくマッチさせていくことが大事です。